

地方都市周辺農村の再活性化に関する研究

～高山市丹生川町の再活性化に向けて～

小笠原 雄太

現在の日本は人口減少社会に突入し、いずれ地方が消滅する可能性さえある状況である。ただし一口に中山間地域といっても多様である。大きくみると 2 種類のパターンのありようが見受けられる。1 つは、林業など古くからの地場産業が成立しない中山間地域で、かつ都市域から離れており、通勤するには行き来が不便であり物品の購入も簡単にはできないところ。もう 1 つは、農業や牧畜といった地場産業もある程度成り立つ中地域で流通等の便益性が一定あり、かつ都市域が比較的近くにあるため日常の通勤がなんとか可能であり、購買活動もしやすい中山間地域である。仮に前者を「限界中山間地域」とし、後者を「都市周辺型中山間地域」と名付けるならば、2 つは同じ中山間地域でもこれから先のあり方や対応も異なると考えられる。

筆者が生まれ育った岐阜県高山市丹生川町は、平成 17 年 2 月に市町村合併して高山市に編入されたまちであり、もともとは丹生川村という行政単位で動いていた地域であるが、合併以前から人口減少や少子高齢化が進んでおり、幹線道路沿いの主要地域では人口減少が比較的抑えられているが、周辺地域においては人口減少が進んでいる。ただ、位置的には旧高山市と隣接しており、上述した区分けで言うならば「都市周辺型中山間地域」に当てはまる。しかしながら、地方都市である高山市も人口が減少する傾向にあり、とりわけ 20 代の人口が他の年代に比べて少なくなっており、当然その周辺中山間地域である丹生川町も、20 代の人数は少ない。

若年層の流出と高齢化により、丹生川町内の各町内活動の継続にも支障が出始めてきている。筆者はこれに対し、このままでは丹生川町が衰退してしまい地域の活が低下するばかりではなく丹生川町内の集落がなくなってしまうのではないかと非常に危惧している。先述した通り、丹生川町は「都市周辺型中山間地域」であり、地域資源等や人的資源を活用することで再活性化は可能なのではないかと考えている。筆者はいずれ丹生川町戻り丹生川を消滅させないために何らかの形で活性化したいと考えており、本学大学院への進学もそのための方途である。

それ故、本調査研究の主要な目的は丹生川再生の可能性とそのため要件を示すことにある。

そのため本研究では、丹生川町の現状と地域資源を明らかにしたうえで、それら都市周辺型中山間地域の特性を活かし、地域を再活性化させる担い手となる若い世代(中堅世代や若者たち)がどのような課題を抱えており、現地での参与観察とヒアリング調査を通じて彼らの現状やこれまでの歩み、地域への思い、希望や意欲等を明らかにすることで、今後の方向性、可能性を探ってゆく。その際重要な点は、常に丹生川に中心地のみが存続するのではなく、丹生川内のそれぞれの集落の若い世代がそれぞれの地で生きていくための思いと方策を提示することである。若い世代へのヒアリング調査に加え、丹生川の山間部出身である筆者自身の思いや経験に対する省察を加えつつ、丹生川地域が隅々まで持続してゆくための方向を明らかにしていきたい。

第2章では、丹生川は高山や町内を通る国道158号線を通じて都会への交通の便が比較的良好いため、「都市周辺型中山間地域」の特性を備えており、まちの産業である農業は順調で、若い世代の地元回帰による就農によって支えられている。また、人口減少している中でも公民館活動や「まちづくり協議会」などがあり、地域のつながりは強い。しかし、就学機会がないため若年層の地域離れが起きているが、若者の地元回帰志向は強く一定数は戻ってくる。ただ、丹生川内での人口格差があり、多くの集落は若者が減少している。そのため、「いかにして若年層に地元回帰を促すか」が丹生川の再活性化のための大きな提起のひとつとしてうかんでくる。

第3章では「丹生川を語る若者の会」を通して丹生川の現状や課題、当面の取り組みそして、今後の提案が明らかになった。丹生川の若者は「人や人のつながり」、「豊かな自然と農業の可能性」、「暮らしの文化」に魅力や可能性を感じながらも「中山間地域としての課題、悩み」を抱えていることが明らかになった。当面の取り組みとして、「人のつながりをつくる」ことや「農業で人を呼ぶ」こと、「丹生川の発信」ができそうだと語られ、ゆくゆくは「人を呼ぶ」ことや「人のつながりを築く」こと、「豊かな自然を活かす」こと、「農業を活かす」ことで丹生川を発展させたいということが語られていた。

第4章では中堅世代のヒアリング調査によって、中堅世代の定住条件や地元回帰条件、特徴等を明らかにした。中堅世代は「丹生川への帰属意識や愛着」や「人のつながり」を評価して丹生川に定住している。農家の人は自分の仕事にやりがいや目標を感じて暮らしている。また、地域との関係を意識しながら生活をしている一方で、人口減少によって若者の地域の役の加重負担について課題を感じている。

第5章では若者ヒアリング調査によって若者の地元回帰条件や若者の特徴を明らかにした。若者は「丹生川への帰属意識や愛着」があり、適度な田舎感を評価して丹生川に居住している。

また、農業に可能性を見出している。そして、若い世代なりの意気込みや反抗心を持ってはいるが、まだ丹生川に住み続けるという確信が持っていない。ただ地域とのかかわりを大切にして暮らしていきたいと考えている。

以上今後の持続可能な丹生川のあり方についての展望や方向性として、丹生川は都市周辺型中山間地域であるため、高山への通勤や農業を基盤として生活ができること。及び、丹生川の若者は「丹生川への帰属意識や愛着」を持ち、かつ適度に田舎で人のつながりや美しい自然を好んでいることを明らかにした。そのうえで、これらは大きな要因であり、今後も大切にしていかなければならないことや、「農業」や「地域のつながり」に可能性を見出しているため、「新規就農者とのかかわり」や「6 次産業化」、「地域の中で暮らす」、「若者が話し合う場を作る」ことが重要であるとしてまとめとした。